

## 突然の出来事に直面した家族の反応をとらえる ～救急事例から～

### 1. はじめに

家族の形態やありようが多様化している現在、家族機能の低下や家族システムの障害など家族の脆弱性が指摘されている。こうした中で日々の看護実践においても、一人一人の家族員のとらえ方や家族全体のアセスメントには困難を感じる場所である。

我々は、家族への支援に関心のある看護職に呼びかけ、2012年度から大阪医科大学家族看護研究会を発足させた。これまでの活動では、家族支援専門看護師の活動や遺伝看護の実際を知るとともに、エンパワメントモデルの学習をしながら事例検討を行ってきた。取り上げた事例は、長期療養児の家族、小児の看取り、精神障害のある患者の家族、退院支援、救急時の家族への対応などである。

これらの検討を行う中で、家族には、家族内での患者（児）の位座（ポジション）、病状や周囲の状況によって、ある特徴があるのではないかと考えられた。そこで、今回のワークショップでは重篤な救急患者の家族に焦点をあて、よくある患者の状況や家族の反応をもとにした家族員および家族全体をとらえるための視点と、家族をアセスメントする時に陥りやすい看護者自身の傾向について話題提供し、共に検討していきたいと思う。

### 2. 救急場面を取り上げた理由

多くの救急場面にみられる特徴のひとつは、その状況が患者・家族にとっては予期せぬ出来事であるということがあげられる。特に、意識障害のある患者の家族は、何が起こったのかを本人に確認することもできない状況にあり、治療に関する重大な判断を早急に求められる場合がある。看護者は、眼前の患者へのケアと並行して、家族への対応・ケアを行う困難さ（山勢, 2011; 木本, 2014）を抱えており、症状が重篤な場合は、短時間のうちに治療から看取りの場面にも変わることもある。こうした深刻な状況下では、短時間であっても的確に家族をアセスメントし、解決すべき課題を把握する必要があると考えた。

### 3. テーマセッションの進め方と討議内容

#### 1) 事例の紹介

緊急搬送された意識障害のある患者と家族について、患者の年齢や疾患の異なる2事例について説明する。

#### 2) ディスカッション

(1) 2事例の家族はどのような家族だととらえられるだろうか。

(2) 短時間での家族のアセスメントではどのような留意点があるだろうか。

#### 3) まとめ

救急場面での家族のアセスメントの視点と看護者の判断について。

### <文献>

- ・山勢博彰：救急・重症患者と家族のための心のケア，8-18，MCメディカ出版，大阪，2011.
- ・木本千奈美：救命救急センターに勤務する看護師の重度意識障害患者の家族へのかかわりの特性，家族看護学研究，19(2)，124-135，2014.